「持続可能性を高めるための地域市民活動の現在
—多様な人々の潜在力を活かすには？」

龍谷大学社会学部・教授　里山学研究センター・センター長
村澤真保呂

【要旨】

本シンポジウムは国際環境政策においてもっとも取り組むべき課題とされている「生物多様性問題や気候変動などの地球的課題と地域市民社会をどう結ぶか」という主題について、その問題に取り組んできた実践家とともに議論することを目的に企画された。

兵庫県西宮市の環境教育と環境政策に長らく取り組み、その先進性により『ニューズウィーク』で「世界を変える100人の社会起業家」に選ばれるなど、国内外で著名な小川雅由氏は、「都市住民と自然をどう結ぶか」という主題で講演をおこなった。小川氏は1980年代から西宮市役所の環境担当部署の職員時代から市民の環境啓発に取り組み、国連地球サミット（1992年）の翌年から市の環境政策を策定するともに、こども向けの環境教育プログラムを立ち上げ、その成果を市の環境保全の政策に活用し、現在にいたるまで発展させてきた経緯を紹介した後、環境問題と市民を結ぶために必要な条件を示した。

田村和也氏は、行政と市民のあいだを結ぶ民間の環境コンサルタントの経験から、「都市型里山保全の取り組み」という主題で講演をおこない、尼崎市のコンビナート跡地の森林公園化など、都市住民の関心が身近な自然環境の保全に結びついた事例をいくつか示し、行政と市民のそれぞれの指向の違いと両者を媒介するために必要な観点を提示した。

松谷真弓氏は「伝統的漁師町から学んだ『持続可能性』」という主題で、和歌山市の加太地域における持続可能な漁業のために里山と海を結ぶ保全の取り組みを紹介し、異なる組織を結ぶコーディネーターとしての観点から、加太の伝統的漁業の保全活動の背景にあるさまざまな人的・文化的資源がどのように結びついているのかを説明した。

講演に続き、ディスカッサントである松田頼彦氏が、京都府の丹後半島で村おこしに取り組んできた経験にもとづいて、上記三名の講師にたいしてシンポジウムの主題に関わるさまざまな質問を投げかけ、登壇者たちとのあいだで活発な議論がおこなわれた。

シンポジウム終了後、登壇者や参加者から「次回もぜひ同様の企画を」という声が多く届くなど、環境問題に取り組む市民の情報交換や交流の場として本センターが機能することへの期待と要望が寄せられ、本センターの取り組みとして大きな意義があったと考えられる。